



P2▶3

ハーベスト・タイム イスラエル学 (37)

P4

シオンとの架け橋 石井田 直二

P5

アリコイリス・ミニストリー 早川 衛

P6

ハティクバ・ミニストリー 高瀬 真理

P7▶8

メシアの家 網本 バフロ

P8

お知らせ 事務局より

巻頭言

新年の祈りの課題と
主にある期待

LCJE 日本支部支部長 C. クリングスミス

2019 年あけましておめでとうございます。

LCJE ニュースの愛読者の皆様の上にこの新しい年の元日の朝一番から大晦日の最後の瞬間まで、イスラエルの神の救い、導き、励まし、慰め、希望、忍耐、勇氣、その他どのような必要であっても、豊かにありますように心を尽くして祈ります。そして、終わったばかりの2018 年において、LCJE 日本支部へのご支援と貴い捧げものを心から感謝いたします。主がお一人お一人の家計と教会会計を守って報いてくださるよう祈ります。

さて、2019 年は世界中のユダヤ人宣教にとって重要な年になる見通しです。それはカナダのトロントで第11 回LCJE 国際会議があるからです。一方、国家イスラエルと各地にあるディアスポラの救われていないユダヤ人たちにもこの地上を去る時が去年より1 年という測りで近くなっています。やはり今年中のユダヤ人宣教は、あらゆる福音宣教と同じように命がけのものであります。

今年中もメシア・イエス様無しの永遠に向かっているユダヤ人が多いのです。愛読者の皆様とともに、今年にわたって次のような祈禱課題をおぼえて祈ってまいりたいと思います。

1、第11 回LCJE 国際会議「Making All Things New すべてを新しくする」のために祈りましょう。申し上げたとおり、カナダのトロントで8 月11 日から16 日までです。テーマのように世界中のユダヤ人宣教に再び刺激を与えようとしている会議です。「召しの更新」「新たなビジョン」「次世代」「新しい絆」「さらなる志」「ユダヤ人宣教への情熱」という毎日のサブ・テーマです。この会議の中心である新約聖書のコロサイ書の学びのセッションをふまえて、どのように参加者と関連しているユダヤ人宣教団などが再び自分の召命感を燃え立たせるか、そして、どのように背後にある関係者にそういっ

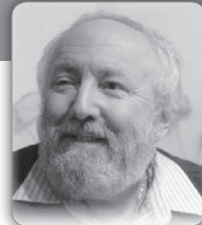
た情熱を伝えるかという目的です。もちろん実践的なセミナーやワークショップや講義もたくさんあります。尚、この第11 回国際会議は今までで一番規模が大きいユダヤ人宣教に関連している国際会議です。LCJE がそれを主催することは光栄です。

2、東アジアの各地で行われているユダヤ人宣教のために祈りましょう。一昨年、LCJE 主催東アジアユダヤ人宣教会議にいられた中国、香港、台湾、韓国、シンガポール、フィリピン、そして、日本の参加者の皆さんは、出会うユダヤ人にイエス様を差し出そうとコツコツ働いていますが、支える励ましがいつも必要です。そのアジアの各地の教会は、ユダヤ人への福音の必要がよくわからないところが多いままです。

特に中国ではキリスト教会やキリスト教関係の機関は、ますます鋭い監視にさらされています。そして、日本の教会は高齢化などのいろいろな課題にますます直面しているところです。各地の教会とキリスト者が抱えている問題に圧倒されないように、そして教会が自分の問題が大きくても主イエス様ご自身のイスラエルの失われた羊たちへの心を自分たちも持つように祈りましょう。そして、東アジアから多くの参加者が無事にトロントへ行って帰ることもできますよう祈りをお願いいたします。

3、最後にLCJE 日本支部の運営に携わっている私たちのために祈りください。昨年2018 年は、いろいろな形で一人一人にとって試練の年になりました。教会、兼牧、兼任、自分自身や家族の身体のことなどによって思いがけない年となりました。

一昨年のユダヤ人国際会議を2018 年に計画したとすれば、おそらく出来なかったでしょう。私たちも圧倒されないようにどうぞ祈りください。2019 年にわたって祈り続けてくださいませんか。



『イスラエル学』(37) ～組織神学の失われた環～ 「霊的ユダヤ人」(第5回)

ハーベスト・タイム・ミニストリーズ 佐野 剛史：訳

本記事は、アーノルド・フルクテンバウム博士著『Israelology (イスラエル学)』の日本語訳です。本書は、イスラエルの過去、現在、将来を論じ、これまで組織神学の盲点であったイスラエル論を体系化した先駆的著作です。

【今回の内容】今回は、ローマ2:28～29を引用して「異邦人がキリストを信じると霊的ユダヤ人になる」と主張する人たちに対する反論の最終回です。ローマ2:28～29を文脈の中に置いて考察した後、フルクテンバウム博士はさまざまな聖書箇所を引用して、異邦人とユダヤ人の区別はキリストを信じた後もなくなならないことを示します。

ローマ3:9で、パウロはこう結論を述べる。

9 では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまさっているのでしょうか。決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。

「私たちは他の者にまさっているのでしょうか」、つまりユダヤ人はさまざまな特権を持っているので、そうした特権を持っていない異邦人よりも優れているのだろうか、という意味である。その答えは、決してそうではないというものである。ここまで見てきて、ユダヤ人も異邦人も、すべての人が神の義に達していないので、すべての人が同じ方法、恵みにより、信仰により救われる必要があることがはっきりした。

ローマ2:17～3:19をここまで長々と取り扱ってきたのは、2:28～29を正しい文脈の中に置くためだった。文脈を見れば、パウロは異邦人クリスチャンが霊的ユダヤ人になると教えているのではなく、すべてのユダヤ人が真のユダヤ人なのではないと教えていることがわかる。この区別はユダヤ人と異邦人の区別ではなく、またイスラエルと教会の区別でもなく、レムナント(残れる者)とそうでない者の区別、つまりユダヤ人信者とユダヤ人の未信者の区別である。この区別はパウロのイスラエル論であるローマ9章～11章でさらに詳しく論じられるが、これについては後ほど取り上げる。

(2) ユダヤ人と異邦人の区別は存在しない

第一の間違った見解は、すべての信者はユダヤ人であるという一切の区別に反対するものであった。第二の間違った見解は、ユダヤ人信者はみなユダヤ人でなくなったというもので、たいていユダヤ人もギリシヤ人もないということを語っている3つの聖書箇所をいくつか、文脈を無視して援用する。こうした聖書箇所を文脈の中でよく調べれば、ユダヤ人と異邦人の区別がなくなったのは一部の領域だけで、まったくなくなったわけではないことがわかる。さらに、関連箇所に照らして3つの聖書箇所を

読むと、信者の間であっても、その他の領域では区別が今も残っていることがはっきりとわかる。

(a) 引用される聖書箇所

よく引用される3つの聖句のうちの1つ目は、1コリント12:12～13である。

12 ですから、ちょうど、からだの一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はいくつ多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。13 なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。

この箇所が明確に教えていることは、キリストのからだに入る方法は「聖霊のバプテスマ」だということである。これが唯一の方法で、それはユダヤ人でも異邦人でもみな同じである。ここに区別は一切ない。これがこの箇所から導き出せる教えで、それ以上はない。

2つ目の箇所は、ガラテヤ3:28である。

28 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。

この箇所の前後では、信仰義認の問題を取り扱っている。信仰だけが義と認められるための唯一の方法で、ユダヤ人と異邦人に関係なく、だれでも同じである。そのため、義認に関しては両者に区別はない。これだけがこの箇所から導き出せる内容で、それ以上のことは何も語っていない。

3つ目の箇所は、コロサイ3:11である。

11 そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。

キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。

ここでも、文脈がこの箇所を理解するための鍵となる。5～11節では、古い性質を脱ぎ捨て、新しい性質を着るようにと語られている。これがどの信者にとっても、ユダヤ人でも異邦人でも、霊的に成熟するための唯一の方法である。それ以上のことを、この箇所から導き出すことはできない。

ここで出そうとしている結論は、もうわかりだと思う。義とされる、キリストのからだの一員となる、成熟に向かって成長するという領域では、通るべき道はユダヤ人も異邦人も同じで、そこに区別はない。しかし、だからといって、あらゆる領域で両者の区別が消え去ったわけではないのである。

(b) 区別が存在することの証拠

先ほど述べたように、この3つの聖句を関連聖句に照らして調べると、ここで言われているのは、すべての区別が消え去ったということではなく、むしろその逆であることが分かる。メシアニック・ジューを区別することに批判的な人々が上記の聖書箇所を引用するときは、「ギリシア人とユダヤ人」の箇所だけを引用して、残りは無視する。だが、上記の聖書箇所はユダヤ人とギリシア人の区別はないと言っているだけではなく、奴隷と自由人、男と女という区別もないと言っているのである。しかし後半の部分は通常引用されない。それはなぜだか、読者はわかりだと思う。聖書がこの後半の2つのグループ、奴隷と自由人、男と女について何と言っているかを考えれば、上記の3つの箇所が区別は消え去ったと言っているわけではないとわかるはずである。

奴隷と自由人について語っている聖書箇所は、エペソ 6:5～9、コロサイ 3:22～4:1、1テモテ 6:1～2、テトス 2:9～10、1ペテロ 2:18 の5か所である。こうした箇所のすべてで、クリスチャンの奴隷は主人に従うように、また主人がクリスチャンであっても従うように教えられている。クリスチャンの主人は、クリスチャンの奴隷を解放するようには教えられていない。もし奴隷と主人の区別がなくなったのであれば、それが当然の帰結であるにもかかわらずである。自由人は、クリスチャンになっても自由人である。奴隷は、クリスチャンになっても奴隷である。それでは、この5つの聖書箇所と先ほど引用した3つの聖書箇所の間には、どのような整合性があるのだろうか。整合性は問題ない。キリストのからだに入る条件、義認、霊的成長の方法に関しては、自由人も奴隷

も同じである。それでも、からだの中で区別は残っている。

男女の区別が消え去っていないことは、7つの聖書箇所がはっきりと示している。このすべての聖書箇所が共通しているテーマは従順で、立場、役割という点でそれぞれが示されている。1コリント 11:3～10では、集会で女はかぶり物をすべきだが、男はかぶり物をしてはいけないと教えている。1コリント 14:34～35では、女は教会で語ることを禁じられている。もし女が何か質問があれば、家で夫に聞くようと言われるまで徹底している。エペソ 5:22～25、コロサイ 3:18～19では、女は夫に従うように、夫は妻が従順になれるように妻を愛するようにと命じられている。1テモテ 2:11～12では、女性に男性を教えることを禁じられている。それが男に対して権威を振るうことになり、従順の立場を踏み外してしまうからである。テトス 2:1、3～5では、若い婦人に対して自分の夫に従順であるように教えることは健全な教理の一部であり、それに反することで神のこばが与えられることになることと語られている。1ペテロ 3:1と7では、夫が未信者であっても妻は夫に従うようにと教えられている。その一方で、夫は妻を敬う必要がある。もし男と女の区別が消え去ったのなら、こうした男女それぞれに別の規定と命令を与える必要はない。こうした聖書箇所は、男女の区別はないとする他の聖書箇所と矛盾するのだろうか。もちろんそのようなことはない。ここでも、キリストのからだに入る条件、義認、霊的成長という面では、男女共に条件は同じである。救いの方に男性用、女性用といった区別はない。霊的成長に男性用、女性用の方法といったものはない。どちらも同じ方法でキリストのからだに入る。からだに入った後も、男は男、女は女であるので、それぞれ立場も役割も違うのである。

(3) 結論

要約すると、異邦人が信仰に入ると「霊的ユダヤ人」になるという考え方は聖書の教えではない。そうではなく、聖霊に支配された異邦人は霊的異邦人になる。霊的ユダヤ人とは、信仰に入り、聖霊と正しい関係にあるユダヤ人のことである。さらに、信仰に入ったときにユダヤ人と異邦人の区別がなくなるとは聖書は教えていない。救いの方はユダヤ人も異邦人も同じというのはそのとおりだが、奴隷と主人、男と女の区別がすべてなくなったわけではないのと同様に、その他の領域で両者の区別がすべてなくなったわけではない。救いの方、からだに入る条件、霊的成長の方法はユダヤ人も異邦人も同じである。それ以外の領域では、区別は残っている。

LCJE ニュースに連載されてきたフルクテンバウム博士『イスラエル学』が、ハーベスト・タイムから発売されました。

価格は **3,000 円 (税込)** で、ページ数は約 400 ページです。お問い合わせはハーベスト・タイムまで

☎ 055-993-8880 info@harvesttime.tv

神戸を訪れたユダヤ難民の足跡を訪ねて

シオンとの架け橋 石井田 直二

本誌読者の皆様は、第二次世界大戦直前、外交官の杉原千畝の発行した通過ビザで約6千人のユダヤ人たちが東欧からシベリヤ経由で日本にやって来たことをご存じかと思います。彼らの大半は、シオンとの架け橋の事務所がある神戸市に数ヶ月間、滞在しました。

2017年、神戸市が彼らの滞在について詳細な資料を発行したため、彼らが市内のどこに滞在したのかを知ることができました。そこで私たちは、難民たちの足跡を辿るツアーを企画し、今年初めから7組、計14人のユダヤ人たちを案内したところ、とても好評でした。

●難民たちの流れ



1940年の夏に杉原氏が発行したビザを使って、その年の暮れから翌1941年の春にかけて約6千人のユダヤ人難民が日本

に逃れて来ました。JTB関係者、敦賀市民、そして小辻節三ら多くの人々が彼らを助けたことが知られています。

敦賀に着いた難民たちの大半は鉄道で神戸に向かいました。そこには、第一次大戦直後にロシア革命を逃れて神戸に来たアシュケナジ系のユダヤ人共同体があったからです。そして、米国のJDC (American Jewish Joint Distribution Committee) という団体が、救援資金を提供しました。

当時、すでにイスラエル回復を祈っていた「きよめ教会」も、彼らに対して組織的な救援活動(写真)を行いました。また、妹尾河童の自伝的小説『少年H』にも、洋裁職人だった父がユダヤ人難民の服を無料で修理したとの記録があります。

当初、ユダヤ難民の多くは北米に向かいましたが、やがてそれは困難になり、彼らは中南米やアジア、アフリカを目指します(右の表参照)。中には南アフリカから大陸を縦断して約束の地イスラエル(英委任統治領パレスチナ)を目指した人々もいました。そして1941年夏には日米の関係悪化で米国からの送金が止まり、神戸に残留していたユダヤ人たちは開戦前に上海に移送され、そこで終戦を迎えました。

●市内に今も残る「遺跡」

一方、ユダヤ難民が去った神戸は、米軍の激しい空襲を受けて市街地の大半が焼失してしまいます。そのため、ユダヤ難民をしのぶ場所はほとんど残されていません。私たちが最初に案内しているのは、難民たちが到着した現在のJR三ノ宮駅です。難民たちを乗せた列車が駅に到着すると、先に神戸に到着していた人々が迎えに来て、駅は多くのユダヤ人であふれたといいます。

次の訪問地は、難民たちを世話した神戸のユダヤ人共同体の事務所(JEWCOM)の跡地です。この場所では、難民たちの救援物資、生活費、食料の配布などが行われていました。また、前述の「きよめ教会」による救援活動が行われたのも、この場所ではないかと考えられます。

もう一つの重要な訪問地は、難民たちが宿泊した建物です。難民たちが滞在した数十戸の建物は、ほとんど全てが戦争で焼失したのですが、当時をしのぶことができる建物が一軒だけ残されているのです。

最後の訪問地は難民たちが船出した突堤の一つ。ここは現在、国際航路の客船のターミナルとなっていて、クルーズ船の寄港の際は多くの観光客でにぎわいます。そこから少し歩くと、当時の建物も残されていて、外から見学することができるのです。

●ツアーとセミナー

今年11月、私たちはヨセフ・シュラム師、斉藤真人師、瀬戸偉作師(戦前に難民の救援活動に関わった斉藤源八師と瀬戸



四郎師の孫)をお招きして上記のコースを回る機会が与えられました。希望者を募り一緒に回ることも考えたのですが、現場は閑静な住宅街で住民に迷惑がかかるため、代表者だけがコースを回った後で、シオンとの架け橋事務所で開催する形にしました。

セミナーには定員を大幅に超える約50人が参加。斉藤師と瀬戸師が証をされ、シュラム師は難民を迎えた神戸市民とクリスチャンたちに謝辞を述べられました。

現在、クリスチャン有志が集まって「神戸ユダヤ難民研究会」を結成し、ユダヤ人たちを迎え入れる準備を進めているところです。多くの案内人を養成する必要があり、また、祈りや献金で活動を支えていただく人々も必要です。関心のある方は、どうぞシオンとの架け橋事務局までお問合せ下さい。

ユダヤ人難民の渡航先

	(人)
北米	2242
中南米	759
パレスチナ	199
インド	16
ビルマ	28
南アフリカ	64
オーストラリア	83
ニュージーランド	30
フィリピン	60
その他	27
上海	966
残留	121
合計	4595

1941年10月2日まで
大阪毎日新聞による



イスラエルの回復のために必要な祈りと神の預言

エゼキエル書 34 ～ 39 章

アルコ・イリス・ミニストリーズ代表 早川 衛

先月号に記したとおり、イスラエルの回復は、エゼキエル書 34 章から 39 章を貫くテーマである。これら 6 つの章には、イスラエルの回復に必要なものとして、人間の回復だけでなく、土地の回復と敵の敗北が記されている。今回は、土地の回復と敵の敗北に触れることとする。

エゼキエル書 36 章には、イスラエルの土地の回復が預言されている。人間は、問題に直面し、苦しむ時、人間に問題があると考え、人間のことを考える。しかし、神は、人間が苦しむ時、人間のことでなく、土地のことをも考える。創世記 4 章 12 節には、「**あなたが耕しても、大地はもはや、あなたのために作物を生じさせない。あなたは地上をさまよひ歩くさすらい人となる。**」と記されている。土地が作物を生じさせることは、カインが生きるための必須条件であった。つまり、人間が生きるため、あるいは、人間の回復のためには、土地の祝福が必要であるのだ。現在、中米ホンジュラス共和国から、キャラバンと呼ばれる数千人の集団が、徒歩で米国へ向かっている。

それは、現在、ホンジュラスの地に、暴力、貧困、不義などが満ち、祝福された人生を送るためには不適切な地となっているからだ。一方、同じ中米グアテマラ共和国のアルモロンガの地は、福音の拡大とともに土地も祝福され、住民は、神の祝福を享受している。このように、土地は、人間の営みにとって不可欠なものである故、悪魔は、土地に何らかの仕掛けを施すのである。エゼキエル書 36 章 2 節のことは「**神である主はこう言われる。敵がおまえたちに向かって『あはは、昔からの高き所がわれわれの所有となった』と言っている**」は、そのことを示している。

エゼキエル書 37 章には、有名な「干からびた骨」に関する預言がある。それは、イスラエル人の回復を示すものだが、そこには、下記のとおり、土地の回復というテーマも含まれる。

(11) 主は私に言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。見よ、彼らは言っている。『私たちの骨は干からび、望みは消え失せ、私たちは断ち切られた』と。(12) それゆえ、預言して彼らに言え。『【神】である主はこう言われる。わたしの民よ、見よ。わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く。(13) わたしの民よ。わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げるとき、あなたがたは、わたしが【主】であることを知る。

(14) また、わたしがあなたがたのうちにわたしの霊を入れると、あなたがたは生き返る。わたしはあなたがたを、あなたがたの地に住まわせる。このとき、あなたがたは、【主】であるわたしが語り、これを成し遂げたことを知る——【主】のことば。』(エゼキエル書 37 章 11 ～ 14 節)

主がこれらのみことばを実現されるためには、イスラエルの土地が必要である。そのため、主は 1948 年のイスラエル国家誕生をとおり、その土地を備えられた。このように、同 37 章には、土地というテーマも、描かれている、と言える。主は、霊的な回復の前に物質的な回復をなされたのだ。

次に、38 章のみことばを見る時、主は、人間と土地の回復だけでなく、敵の敗北をも預言せよ、と命じられたことが理解できる。同 2 節から 6 節には、終わりの時、イスラエルの敵となる国々の名前が挙げられている。それらの中のメシェク、トバル、マゴグが、現在のロシアであると解釈する学者は多い。そして、それを裏付けるかのように、ロシアは今、着々と軍事力を強化しており、現在の軍事力は、ソ連崩壊後、最大規模に膨れ上がっている。

また、11 月 14 日、米国議会超党派の委員会は、今、米軍が、ロシアおよび中国と戦争をすれば、敗北もあり得るというデータを発表した。したがって、今後、ロシアおよび同国と関わる国々（例えばトルコなど）から目を離さず、執り成す必要がある、と思路する。同時に、ゼカリヤ書 14 章 16 節のみことばを覚える必要がある。同節には「**エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の【主】である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。**」と記されている。つまり、イスラエルを攻める国々の中にも救われる者がいるのである。すなわち、神は愛であることを忘れてはならない。

多くの学者が言うように、同 38 章 13 節に記された「シェバやデダン」はサウジアラビア、「タルシシュ」はスペイン、そして「そのすべての若い獅子たち」はスペインから独立した国々であるかもしれない。それらの国々は、次のように敵に言う、と預言されている。「**おまえは分捕るために来たのか。獲物をかすめ奪うために隊を構えたのか。銀や金を運び去り、家畜や財産を取り、大いに略奪しようとするつもりか**」と。

イスラエルの回復のために必要な祈りは、神の預言に基づくものである。したがって、イスラエルの回復を執り成し祈る者たちは、神の預言のことばを叫ぶ者でもある。



忌み嫌う「人」

ハティクバ・ミニストリー代表 高瀬 真理

神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。(エペソ 1:5)

父なる神による霊的祝福は、私たちを神の子どもにするよう、あらかじめ定められたことです。(ここにも、「イエス・キリストによって」という言葉が出てきますね。キリストにあって、すべての祝福があるのです。)

あらかじめ定めること、「予定」とも呼ばれますが、悲しいことに、激しい神学論争によって、この霊的真理のすばらしさを見えなくさせています。人は、永遠の昔から、救いに定められている者と滅びに定められている者がいる、という予定論。それに反対して、神はすべての人が救われるのを望んでおり、その人の運命は、その人がキリストを信じることを選び取るかどうかに関わる、という自由意志を強調する。

しかし、ここでは、そのような論議をするのではなく、ただ単純に、神が私を、ご自分の子どもにされることを予め定められたということに素直に驚き、喜んでいればよいのです。

が、しかし「人」は様々な理由から、それが何の理由かも知らず、忌み嫌う弱さを遠い昔から現在も、もち続けています。読者の皆様もよくご存知な W・A・MOZART (モーツァルト) という音楽家をご存知ですね。敬虔なカトリック信者であった彼は、神の家族として尊敬していた女流作曲家でピアニストでもあったパラディスに心を痛めていました。

モーツァルトの生きていた時代は、女性が何かをすること「忌み嫌う」男性が多かったようです。パラディスは、視力が悪くほとんど盲目でした。そのため、心ない男性たちが彼女の譜面に落書きをしたり、ゴミ箱へ楽譜を捨てたりひどいことを彼女に対して行いました。

これは筆者の想像ですがモーツァルト 2 台のピアノのためのソナタ 二長調 K.448 という作品は、そのような彼女を励ますために、モーツァルトが、作曲した楽曲ではないかと考えています。五線紙に置かれている一つの音符が主の「愛」に満ち溢れているのです。お互いが、お互いの存在をさらに高めていく、その背後には主の「祝福」に感謝し、賛美する音色が広がるのです。そのような中において、主を賛美する彼女を主は祝福しました。盲学校を設立し、目の見えない方々に音楽を教えました。彼女の理解者に支えられ様々なコンサート＆作曲活動を展開しましたが、現在彼女の作品元譜面は…残念ながらほとんど残っていません。

その時代は、彼女を作曲家・音楽家と認めたくない…忌み嫌う人々がいたのです。では現代のイスラエルという国を世界の人々はどのように考えているのでしょうか。やはり、忌み嫌う「人」がそこにいるのです。

読者の皆様は「イスラエル」を国家として認めていない国々がどれほどあるかご存知でしょうか？ イスラエルを国と認めない国マレーシアを少し見てみましょう。マレーシアはイスラエルを国として認めていないのでマレーシアから直接イスラエルに荷物を送れないのです。さすが、国の 6 割がイスラム教徒、さらにイスラエルのパスポートでは入国不可のマレーシア。国自体がイスラエルを国家と認めていないのだから、郵送会社も「存在しない国」には荷物は届かないのです。なんと中近東の 11 カ国だけではないのです。世界で 42 の国家がイスラエルを国と認めていない（外交関係を一切持たない）のです。アフリカに 12 カ国。中南米に 3 カ国。マレーシアと北朝鮮を含め、アジアの 8 カ国。イスラエルの労働ビザを持つ人が行けない国がいくつもある。

その理由は様々な事柄ではあるだろうけれども「人」のもつ弱さ…真実な神を知ろうとしない。イエス様の謙遜をなんらかのゆがんだ「人」の知識の中で自分に置き換え高慢となり国家レベルで盲目になっているのだと思います。「人」の知恵や「力」ではとても考えられないイスラエル国の存在に「目」を留めることが出来るよう、イスラエルを忌み嫌う「人」たちの事を覚えて執り成し祈る必要があると思います。

冒頭にも書きましたが…ただ単純に、神が私を、ご自分の子どもにされることを予め定められたということに素直に驚き、喜ぶことが出来ないこと。これが私の内にもある人の弱さです。

放蕩息子のお話を思い出してください。この息子は、父からの財産の分け前をすべて使い果たしてしまいました。今は、ぶたよりもひどい生活を送っています。そして彼は悔い改め、父のところに戻ります。息子の財産は使い果たしたので、もちろん、息子としての身分として受け入れてもらおうとは思っていません。「しもべの一人のようにしてください。」と彼は父に言いました。しかし、父は、この子に一番良い着物を着させて、手には指輪をはめさせ、足にくつをはかせました。父は、この子を遺産を受け継がせる息子の身分にすることを、彼が戻ってくる前から、予め決めていたのです。私たちが、神の子どもとなり、神の家族に入れられるとは、なんとすばらしいことでしょうか。そのことを感謝し、賛美しつつ、ユダヤ人にも声を大にして神の家族になれる幸いと、救いを祈りつつ…忌み嫌う「人」をも覚えてこの 2019 年熱く執り成し祈ろうではありませんか。

神が起こされた不思議な奇跡、イスラエルでのミッション

メシアの家代表 網本 バフロ



「ああ自分はイスラエルに居るんだ」そう思わずには居られなかった。

イスラエルから帰国して時間が経った今、色々なことを思い出している。色々あったが、一度まとめてみたい。

今回のイスラエルミッションを決心したきっかけについて。イスラエルでのミッションはメシアの家のビジョンになっているが、資金のこともあり、創立してから10年以内にはイスラエルに行けるように祈り続けてきた。メシアの家創立5周年記念パーティーの時に参加者の皆さまからイスラエルのための寄付金をいただき、さらにイスラエルのメシアニックCongregationsのリーダーと連絡を取り続けていた縁で、9月にイスラエルへ行くことになった。10年以内に行けたら、と思って祈り続けてきたが、こんなに早く行ける日が来るとは、と信じられなかった。

イスラエルで大きな祭りが行われる9月～10月が良いタイミングになり、神の導きを感じられた。そういうわけで、9月6日～10月25日までの約2ヶ月間、イスラエルに滞在することになった。聖書に登場するアブラハム夫婦は最初からイスラエルにいるわけではなかった。主が移住せよと命令を下し、カナンの地を踏むことになった。(創世記12:1-7) その時のアブラハムと同じような気持ちだった。参加者の皆さまから寄付金をいただいたこと、Congregationsのリーダーと連絡を取り続けていたこと、イスラエルで大きな祭りが行われる時期が近かったことから、自分がイスラエルへ行くことは主からの導きなのだと確信した。それで、イスラエルでのミッションを決心し、生まれて初めてイスラエルに行くことになった。

私は日本人であり、イスラエルのろう者コミュニティからどう見えているだろうかと気になっていたが、想像していたよりもずっと、イスラエル人のろう者は友好的で、温かく接して下さった。世界には色々な人がいるが、イスラエルで友好的な関係が築けたことがとても嬉しくあり、主のわざを目のあたりにした気分である。最初の1ヶ月間は、メシアニックCongregationsのリーダー(ヨーロッパ出身)の自宅に泊まらせていただいたが、その間に、

神の導きで、何人かのイスラエル人とすばらしい出会いがあった。そのおかげで、残りの1ヶ月間はイスラエル生まれでイスラエル育ちという生粋のイスラエル人4組の家に泊まらせていただくことができた。温かく歓迎して下さった彼らに大変感謝している。

また、イスラエル人のろう者コミュニティで有名な方が私のことを多くの方に紹介してくださり、イスラエル全国のろう協会、ろう学校で講演をさせていただくことになった。(ろう協会9か所、ろう学校2か所) ろう者の日本人で講演するのは私が初めてらしく、その大役を重く受け止め、イスラエルと日本の文化の共通点について講演させていただいた。その後、多くの方々と交流することができた。講演会の参加者はユダヤ人の方がほとんどだったが、中にはアラブ人の方もいて、私の講演を聞いてくださったことがとても感慨深かった。

イスラエル人のろう者の家にホームステイすることでイスラエル手話を習得し、イスラエル人のろう者と普通に話せるようになっていた。手話通訳を通してではなく、直接イスラエル人と話すということはとても大切なことだと考えていたため、それが出来たのはとても意義のあることで、神のわざに他ならない。ホームステイをしていて、イスラエルの文化が日本の文化と違うことに少し戸惑う部分もあったが、イスラエルの文化を受け入れ、色々なことを語り合ったことも貴重な経験となった。

そして、帰国する前日に、サプライズでイスラエル人がお別れパーティーを開催してくださったのだ。約40名が集まって下さり、別れを惜しみつつ、色々な出来事、良かったこと、印象に残ったことなどを語り合い、とても良い時間を過ごさせていただいた。

帰国して少しだけ時間が経ち、思い返してみると信じられないことだらけだった。主が奇跡を起こされた、そう言ってもいいほどだった。本当にすばらしい2ヶ月だった。聖書にある、ローマ9章～11章。主はイスラエルを非常に愛しており、私たち異邦人が主とともにいられるのは、イスラエルが主に愛されているからだ。そのぐらい、主とイスラエルの間には深い関わりがある。

イスラエル人と私たち異邦人の関わりを考えると、やはり異邦人はイスラエルのことを愛することが重要になってくる。そのことを思い、主が私をろう者の日本人代表と同等の立場としてイスラエルに遣わして下さいという、主の大いなる奇跡に今でも感動している。

..... 8P へ続く▶

イスラエルでのミッションにて発見したイスラエルのろう者コミュニティに関する情報は、



今回のパートⅡにて皆さんにお伝えしたいと思う。5周年記念で寄付して下さった参加者の皆さま、このニュースレターを読んでお祈りして下さっている皆さまのおかげで、初めてろう者のメシアニックジャパニーズとしてイスラエルへ行き、ミッションの第一歩を踏み出すことが出来ました。本当にありがとうございました。感謝を申し上げます。

今回のことで、これから主の計画のひとつとして、聴者と対等に環境を整え、伝道していくことが明確になったので、これからも続けてイスラエルろう者への伝道のため、励んでいきたい。皆さまもぜひ、お祈り、応援をして下さると心強いです。また、ご寄付もどうぞよろしくお願いいたします。

"私たち(ろう者を含む)は、メシアが罪の贖いをして下さったという福音を(イスラエルのろう者を含む)すべての人に伝えなさいとの命令を受けました。"
(マタイ 28:18-20)

●ご寄付の振込先【メシアの家】

< ゆうちょ銀行 >

記号 10080

番号 87052131

メシアノイエ

※ 他銀行からお振込の方は店名、店番が必要になります。

店名 00八(ゼロゼロハチ)

店番 008

普通預金 8705213

お振り込みいただいた後、ぜひ Email にてお知らせ下さい。 Email : info@hom-japan.com

LCJE

LCJE日本支部事務局レター

LCJEは、ユダヤ人伝道団体の情報交換ネットワークです。加盟しているユダヤ人伝道団体それぞれの立場・活動を尊重して、機関紙などに情報を掲載しています。しかし特定の立場・教理などを、LCJEとして支持するものではありません。読者におかれましては、個々の見識によって提供される情報を判断してくださいますよう、お願いいたします。

2019年度祈禱会予定

場 所	1月	2月	3月	会 場
大阪(6:30より)	10日	14日	14日	北浜スクエア(VIP関西センター8F)
東京(1:30より)	12日	9日	9日	御茶ノ水クリスチャンセンター 8F 811号室

【大阪祈りにご参加される方へ】 第二木曜日午後6時半開始です。会場はVIP 関西センター8Fです。

【東京祈りにご参加される方へ】 ご注意ください▶通常祈りの会場は、811号室ですが、変更される場合があります。

階下の掲示板をご覧になってご参加ください。

LCJE日本支部2018年11月度会計

収入・献金			支出・現金		
科 目	金 額		科 目	金 額	
献 金	171,078		事 務 費	8,800	
大阪祈り会席上献金	10,000		NEWSレター製作費	50,120	
			郵 送 費	40,500	
			郵便振替手数料	3,500	
			通 信 費	5,500	
			賃 借 ・ 管 理 費	21,600	
			高 熱 費 ・ 共 益 費	8,670	
			交 通 旅 費	7,000	
			広 告 費	0	
			祈 り 会 経 費	14,000	
合 計	181,078		合 計	159,690	
			差 引 残 高	21,388	
前月よりの繰越	108,688		翌月への繰越	130,076	

事務局よりのお知らせ

LCJE日本支部では、皆様からの声、そして証や、記事の御投稿をお待ちしています。インターネットでの御投稿、原稿用紙での御投稿いづれでも大歓迎いたします。文字数は2000文字前後でお願いいたします。投稿記事は、封書で送っていただくか、LCJEJAPAN@HOTMAIL.COM 又は FAX 072-867-6721 まで。宜しくお願い致します。

編集後記

2019年がスタートしました。コ・ワーカーの皆様今年もLCJE日本支部を覚えてご加柄くださいますよう、よろしくお願い致します。今年も、皆様のお手元へニュースレターをお届けできる幸いに主のみ名を賛美いたします。

今月号も興味深い内容で一つ一つの記事に主イエスの「福音」がユダヤ人へ届くようにと…祈りが込められています。感謝です。今月も一人でも多くのユダヤ人が祖国へ帰還し、救い主を受け入れ、救われます様にお祈りください。私たちの大きな目的は、イスラエルに平和がもたらされることです。是非大阪祈り会、東京祈り会へもご出席ください。

2019年もコ・ワーカーお一人一人に主の祝福がありますように。
シャローム LCJE日本支部事務局長 高瀬真理

LCJE日本支部は、皆様の尊い献金で支えられています。感謝